

## 巻頭言

# 日本におけるメソジスト教会の伝統をめぐって

岩本 助成

「日本とメソジスト教会」を特集テーマとして、学会誌第2号が出される運びとなった。テーマに従って特色ある論文を執筆して下さった方々の労に心から感謝したい。諸論文を正確に読むことを通して、研究成果に応えたいと願う。また、昨年の研究会講師、馬淵彰氏の研究の一端も収録された。英国史学の伝統的な堅実さを示す研究発表であったが、その内容に改めて教えられる点が多くあろう。さらに、この出版のためになされた編集委員各位の尽力と、教文館が続いて示して下さるご理解とご支援とに対して、厚く御礼を申しあげたい。

戦後間もない頃であったと思う。当時、中学生であったわたしは、山口県の日本基督教団柳井教会において教会生活をおくっていた。土手町にあった古い会堂時代なのだが、礼拝堂の後ろの小部屋の壁に、一人の外国人の肖像画がかけられていた。それが誰であるのか、毎主日、気になって仕方がない。ある礼拝後、伊藤賢人牧師に思い切って尋ねて見た。「先生、これは誰の肖像画ですか。」「この人はね。ジョン・ウェスレーという人で、わたしたちメソジストの伝統に生きる教会の歴史をたどって行くと、第18世紀信仰復興運動の創始者として、この人物に至るのです」と教えて下さった。これが、ジョン・ウェスレーという名前をはじめて聞いた忘れ得ない経験である。

私事にわたるこのような小さなエピソードを持ち出したのは、決して個人的な思い出にふけるためではない。わたしたち、ひとりひとりが、現在のような教会生活を過ごし、また、ジョンとチャールズ兄弟をはじめ、メソジス

ト教会の伝統について学ぶことが出来るようになった背後には、教会的伝統の大きな流れに育まれてきた事実があるのであり、教会における生命的なかわりがあったからこそであることを強調したかったからである。

もちろん、教会的伝統をメソジスト教会のそれのみに限定することはゆるされない。アウグスティヌスやルターやカルヴァンと無関係なキリスト教会の伝統はあり得ない。しかし、神の御摂理によって、わたしたちは日本においてメソジスト教会の伝統に育まれて生かされ、「主の御体なる教会」の一器官としての歩みを与えられてきた。その上、わたしたちを育ててくれたメソジスト教会の教会的、神学的、歴史的、社会的な歴史や意味合いを学ぶ者たちとして導かれてきた。

また、わたしたちが忘れてならないのは、日本におけるメソジスト教会の伝道と教育が、世界にあるメソジスト教会とのかかわりと拡がりにおいて成り立っている事実であろう。上記の伊藤牧師の場合を考えて見よう。先生と御夫人は、長野県ほかの地におけるメソジスト教会で生まれ、関西学院大学神学部とランパス女子神学校で学ばれ、また、中国地方一帯でのランパス先生はじめ多くの宣教師や牧師方の献身的な奉仕の後を受けた形で数十年の牧会生活を過ごされた方々である。先生方も大きな教会的伝統なしには、信仰の歩みと伝道奉仕を全うされなかったことであろう。

さらには、多くの宣教師たちを祈りと支援を通して日本に送り出してくれた世界各国のメソジストの群れに心を致すことができる。わたしたちは、この機会に、これらの諸教会への感謝の念を新たにすると共に、新しい世紀を通じて、世界各国へのわたしたちの貢献と使命を育成して行きたいのである。

1783年4月、ジョン・ウェスレーはダブリンで、今まで行なってきた一つの説教を書き下ろした。イザヤ書11:9「大地は主を知る知識で満たされる」に基づいた説教で、「福音が全世界に行き渡る」ことを語り伝えたものであった。彼は信仰復興の恵みが数十年しか存続しないとされていた当時の常識を、神の御言葉に立って見事に打ち破った。そして、アジアやアフリカにも福音が伝えられて行くことを確信して語っている。そのメッセージの主旨

である世界的規模での宣教が、今日の常識となっている。

本学会に所属する会員諸氏の労作が、今後、日本国内のみならず、広く世界のメソジストの群れや各国のウェスレー・メソジスト学会に対して、学問的で霊的な貢献を続けて行くことを期待して止まない。第21世紀の教会や社会に生きるとは、そのような教会的で神学的な責任と使命に生きることにはかならないからである。

(大阪キリスト教学院長)